

特 253

859

与精讀
生分遺稿

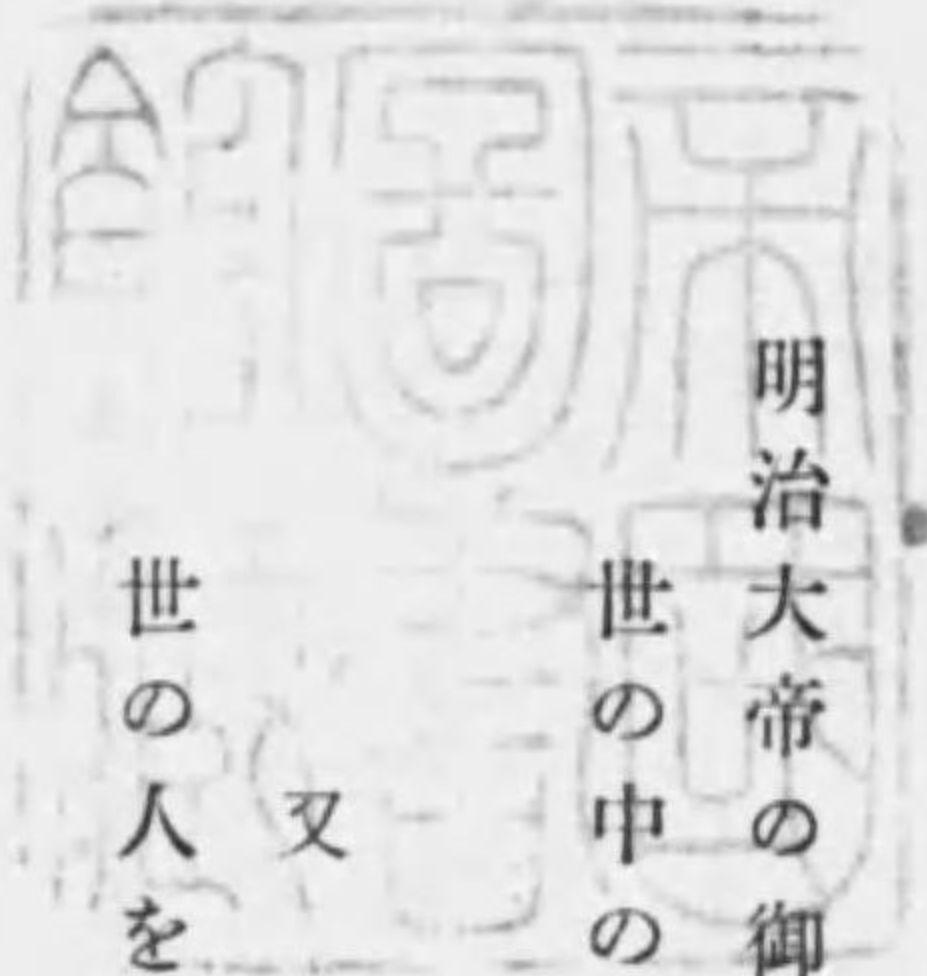
大
事
主
義

臥牛莊主人華城述

始



特253
859



明治大帝の御製

世の中の人のつかさとなる人の

又
身の行よ正しからなん

世の人を教ふことも難からん

又
身の行の正しからすは

序

大事主義

著者寄贈本



忠君、愛國、自治、正直、報恩、奉公など世に數多の題目もあるが、苟も世を治め、民をして幸福を得せしめんとするには、逆も月並の愛國論や、忠孝主義の一點張り乃至は儀式的、畫一的教育などでは間に合はぬように思はれる、教育の必要なる事は勿論なるも先づ第一に支配階級に

在るものが己を正しくしてかからねばむづかしい、明治大帝の御製こそ誠に仰ぐも畏きことで最も心せねばならぬことである。それにつけても、つまり人類同胞の相互の大事心より發露し來りて覺へず御製の大旨に合致するといふようなものでなければ最も穩健なる調節作用は行はれさうにも思はれぬ。萬卷の書を學ぶも實行の難きに至つては何等の効果をも得難きものと思ふ。大事第一主義は、人類愛、相互扶助、總人類の幸徳主義、人類平和の一大思想に據つたものであることはいふまでもない。予は決して好んで矯激の事をいふのではないが、極言すれば人間は生きるといふ事が先決問題である。然るに今日は其生きるといふ事の第一の出發點たる働くといふ事さへもが、自由にならぬではないか。此自然の結果として他を倒して自己を立てねばならぬといふ情勢を見るの止むを得ざるものがあるのではないか。左に掲げたる十個の條目も大事第一主義に始まり實行第十に止めを刺す。これは單に人類同士に止らず、萬事萬物大事の心で之を取扱ひ之を實行せよ、即ち何にでも大事なれ、といふ事なのである。而も其事最も常識的で總て坐して言ふべく起つて行ふべき容易な事ばかりで、あへて決して實行難の虞なきことを期したものである。故に大事といふ事は結局平和の大根本、人類幸福の總基礎を爲すものである。苟も大事心にあらば何派も何黨も天下皆一に歸するものだと思ふ。何時いかなる事にも大事の心に満たな

ければ最善最良の結果は擧げ得られない。ここで尙一步を進めて言はんと欲する所があるのだが、書は言を盡さず、此一項兎角世の誤解を招くの虞があり勝だから、寧ろ未だ鱗を獲ざるに筆を止むるの勝れるに如かずとした。

讀者宜しく無絃の琴を弾じ、無字の書を読み、能く其理路を推して眞味を嘗められんことを希望する。予は今斷言して置くが此大事主義こそは、餘程やり損じても彼の龍を描いて虺に成るよ
うな事は決してない。心誠に之を求めば中らずと雖も遠からず。最も安心して最も大膽に踐行して決して誤りのない事を牡丹餅大の印を捺して保證する。

嗚呼我將來を託すべき世界の男女青年否我心友諸君、予は諸君が幸に大事なる此諒解を以つて日々夜々に之を反覆し、且精讀、實行、世を救ひ人を助けんが爲めに將た寧ろ其立身出世の爲めに苟も油斷なからことを是望んで止まざるのみである。

昭和十八年盛夏鏗金之候

著者しるす

大 事 主 義

前 編

現世の思想界の動搖は經濟的、社會的の變動から來るので、早晚勿論永くはかからうが、緩和され安定されるかも知れない。併し深く一體人間の心の安定を何處に求めたものか、自分は哲學者でもなければ宗教家でもない、併し素人だとしてそんな事を考へていけないと言ふ法もあるまい。よくは知らないが哲學と宗教とは根本から違ふのじやないか。哲學は解釋であり、宗教は信仰である。一は思惟であり、他は感情である。一は概念であつて他は力であると思ふ。隨て兩者の一致するといふことは六ヶしいものである。一體人間には理窟でどうする事も出来ない或物がある。

好き嫌ひとか、美醜とかいふはそれで、信心もまたそんなものであらう。元來人の心はもと渾

然たる一體であるべきを哲學だ、いや宗教だ、藝術だ、道德だと割據して居たんでは必ずそこに何等かの缺陷が出来る筈と思ふ。是等を引つくるめた或はその根柢たるべき或物があるならば之を信條として安住の境に落付かれる譯だが、これこそ古來賢哲の心血を瀉ぎ盡して尙且つ容易に達し得られないものだ。併し自分はそんなものがあつて呉れさうなものだと常に思つて居る。そして朦氣ながら今の處で、こんなものではないかと考へたものがある。今大膽に披瀝して大方の叱正を仰ぎたい。つまり「蟹は甲羅に似せて穴を掘る」たぐひと御容赦願ひたい。

扱て煩惱解脱、安心立命は宗教の使命であるが、宗教にも幾多の種類があつて、吾々素人には六ヶしいが、大別して他力と自力とせられよう。初めから神又は佛ありと信じ一切これに御任せして安心を得ようとするのが前者で、自分で苦んで悟を開くのが後者である。吾々も他力で安心が得らるるならば之に越した事はない。それが出来る人は寧ろ仕合だと思ふ。併し乍ら悲しい哉、今日の世に生れ、今日の教育を受けて理智に傾き過ぎた吾々には、どうもその氣になり難い何等かそこに理性の満足を要求する。そこで他力よりも寧ろ自力で悟りといふものが開けるならば、それで行きたい様な氣がするのである。

自力の宗教とは外にもあるか知らないが先づ禪であらう。處がこれが又至つて六ヶしい。所謂

荆棘參天の難透物で吾等下根の者は齒も立たないものらしい。先づ大概の人は一寸と參禪をして、例の「隻手音聲」などでいちめられ、兜を脱で下つて了ふ位がせきのやまである。物好きや出來心でやられるものではなく命がけの仕事である。一體禪の問題則ち公案といふもの位わからないものはない。それもその筈で、もと／＼矛盾した事を並べてをいて、それを一つにしようにするので。そこに苦心もあれば妙味もあらう。或人は「走つて居る汽車を止めて来い」といふ公案を貰つた。どうしてもわからんから仕方がなくて、とう／＼「レール」に立つてアツヤ襟さ殺されんとする一刹那忽然として悟つたといふ話もある。

一體禪とは一所に定着しない事で「悟つた」とか言ひ得る處に定着が生じ、隨て差別が出来る凡夫は有は永久に有、無は永久に無と信じ切つてそれを宛てにする。則ち差別界を眞相とするによつて迷が生じ、苦しきも生ずる。財産家は永久にこれが我手から離れぬと思ひ込むより、一旦の變によつて、それが消え失せた時に悲愁を極める。親や子供は何時迄も息災のものと思ふにより突然の事が起つたら、身も世もあられず嘆き悲しむ、生身であれば吾命さへも今日あつて明日ないものと常に觀念してさへ居れば臨終に際して錯亂顛倒する事が無い筈である。故に禪では有といへば直ぐ無だ、若し一寸でも定着して安心したら墮落だ。さうなると口では何んとも言はれ

ない。釋尊の最後の説法に拈華微笑して一言も發しなかつた、此法が抑も禪の起りだと傳へられるが事實はどうか知らんけれど、言語に絶する處——言語道斷——は蓋し禪の禪たる處であらうか。禪は淺草の玉乗りの様なもので、玉の上に休む暇はない。玉の上に「チツ」として居ては、ちぎりに落ちてしまふ。則ち「動中有靜、靜中有動」の妙諦を端的に看取した心持がする。

昔永井信濃守尙政が老中になつた時、井伊掃部頭直孝に心得を尋ねた。直孝儼然として曰く、「油斷大敵」と體驗より得來つて自然にこの妙機に叶つて居る。昔劍術使は太刀先三寸にして身をかはすとは、これ則ち劍も、禪も玉乗も同様で、「一劍懸て天寒」此境界は口にも筆にも到底表はし得られない。しかし自分は常に思ふ、元來人間の道といふものは、そんなに六ヶしいものではない筈だ。然るに餘程難行苦行でもしなければ迎もわからんものの様に思ふのは抑々間間違である。

「道在二乎邇」却求ニ之遐」で毎日々々平穩に暮して行けるのは自然に道に叶つて居る證據である。それを尾端をつけたり金箔を塗つたりするから、わからなくなる。その道と何ぞ「差別超越、定着禁物」に外ならない佛教者の玉手箱なる「般若心經」も結局煎じ詰めた處と言へば
色不異空 空不異色 色則是空 不生不滅

不垢不淨 不增不減 心無罣礙故 無有恐怖
遠離一切顛倒夢想

の文句に盡きたるものである。其の中でも「色則是空」の四字の外は同じ事を繰返すが又此妙理の功德を稱讚したに過ぎない。要は矛盾を超越し圓融自在なり得れば一切の迷妄を脱却して心中一點の罣礙も恐怖もなくなる譯だ。尤も是こそ真正銘の道で御坐ると安心しようものなら直ぐ三十棒の用心は肝要ではあるが、「老子といふ本は善惡聖凡一切ぶちこわしの論法で古來危險書類扱にされて居るがこれもよく見ると頗る平凡な説き方に過ぎない。當時あまりに差別的に煩瑣な儀禮に捉はれた時弊を慨して、此言をなしたものであらうが要點は今まで述べ來つた處と少しも變りは無し。

道可道非常道 名可名非常名 大道廢 有仁義 智慧出 有大偽、上德不德、是以有德、下德不德、是以無德

全篇殆んど此流儀だ、「不言の教、無爲之益、天下希及之」など禪其儘だ。

孔子は怪力亂神を語らざる主義で玄妙危矯の説を避けて努めて穩健な教を垂れたか、千言萬語も此外に出でない「不知命無以爲君子」とも又「疾固」とも説かれて安心執着を戒めて

居る。易經に至つては六十四卦三百八十四爻時處位の變によつて中道を説き盡したもので、易といふ文字自身が變化を意味して居る位である。其中に、

易 則易知簡 則易從（中略）易 簡即天下之理得矣、天下之理得 而成德乎其中矣
とあつて道といふものの簡易であるべきを示したものだ。されば禪の難解な問答でも老子の危矯な文句でも儒者の唱ふる處と煎じ詰めれば唯だ是れ玉乗りと同様人間の境遇は轉がる玉の様にいつも變轉するものと覺悟して居るならば、そして心で調子を取つて油斷せず、あれやこれやと搜し廻つて居らず、迷はずに居れば御手許の至つて分り易い事が頓に呑み込めることになる。

蘇東坡が詩に、

盡日尋春不得春

草鞋踏遍龍頭雲

歸來笑撚梅花嗅

春在指頭已十分

理窟はまあざつとこんなものだ、して見ると彼だ我だ、人の物だ、己の物だといふ執着を離れ得るならば、迷の夢もさめて、所謂圓融無碍、人は生れて來た時は、裸一貫だ、みんな後からクツ着いたものだ、時節が來ればそんなものは無くなるにきまつて居る。抑もの吾等の命さへが永久不變の存在で無いではないか、自分は前に「差別超越、定着禁物」を説いたが中々六ヶ敷い事

ではあるが眞に體得徹底し得たならば、火海の娑婆も即ち寂光の樂土と化するであらう。人は一度は死んで行くものときまつてゐる。死ぬとなれば一切空寂で親もなければ子も無い、家もなければ國も無い。否自分さへも無くなつて仕舞ふ。しかし此の世に生存してゐる間は假に理窟はそれでよいとしても世間は通らない。そこで今一息の工夫を要する。物理學の教ふる處に従へば光も熱も音も色も皆振動數の差だ。萬有の唯是れ電子の結合の程度様式の別に外ならぬといふ。かなれば世界は一切空だ、併し眼を擧ぐれば山河在り、人は働かなければ食ふ事が出來ない。

山鹿素行の「配所殘筆」の中に、

老莊禪の作法は濶達自由に候て性心の作用天地一枚の妙用高く明らか成様に被存候て何事も本心自性の用所を以つて仕り候故滯る處無之、乾坤打破仕候ても萬代不變の一理は惶々洒落たる處無疑存候、然共今日の日用事物の上に於ては更に合點不參候故、是は我等不器用故に可有之候今少し合點候て可參と存候て彌々此道を勤め候、或は又日用事物の事は甚だ輕き儀如何様仕候ても不苦儀とも存候得共、五倫の道に身を置き日用事物の間に應接仕り候得ば左様には不能成候て、つかへ申候。

全くその通りだ然らば「色則是空」は最後の眞理ではないのか、抑も有の儘の道は即ち天の道

だ、それを人界に引き下して始めて人の道が生れる。中庸は、

誠者天之道也、誠之者人之道也。

真理に二つはない差別超越、汽車止めの「公案」工夫の中に人道の奥儀は潜む、差別を無くするとは其物々一體となる事である。口角泡を飛ばし、果ては掴み合まで行くのは雙方自分の勝手のみ言ひ張つて人の言分を聴き分ける餘裕が無いからだ、然に目が眩めば骨肉でさへ血まぶれ騒ぎを起す、甲が乙の身になり、兄弟互に地を換へて考へれば自他一體汽車止めの筆法とはそれだ。既に差別なし、即ち平等であれば人格は對等は道德の根基だ。尤も對等と言つても無條件の無差別とは違ふ。親と子は地位、年齢即ち身分が違ふ、その異なる儘に對等だ。親は素より尊ばれるべきだ。それと同じく子も亦た尊ばれるべきだ。教師と生徒も亦その通りだ。赤坊も尊ばれるべきだ。彼等は後繼者として次の時代を經營し發展させて呉れる尊い人格だ、祖先は尊ぶべし。同時に子孫も尊ぶべきだ。一方は他の手段でなくして、それ自身目的であらねばならぬ。現代の思想は著しくこの傾向が明瞭になつて居る。之は決して新しい問題ではないのであるが、併し時代の推移につれて範圍も廣くなり、程度も明瞭になる。幾百千年の後、更に一層此方面に進んで止まぬことであらう。

曾てラッセルの書を見た中に、人は自由々々といふが自由には何等の理想を含まない、自由とは束縛を脱した状態に過ぎぬ、平等とつづいて初めて生きて来る。自由と平等とは一つものに考へるのは間違だと。處で佛教では常に人間の平等に限らない、一切萬有悉く平等觀だ「草木國土悉皆成佛」茲に至つて我等は無限の敬虔の念を起さず居られない。人間を超絶して宇宙と融合するに至る或書に「宇宙は生物である」とあつたが、シテ見れば吾等は宇宙の一細胞だ、法華經の中に恒河沙の諸佛が百千萬億那由多阿會祇劫の昔から此法を説いてゐるといふ風な事が書いてある。初めは荒唐無稽も程があつたものだと思つて居たが、よく考へると「悉皆成佛」の真理を具體化して詩的に述べたもので悉く真理である。此の時間空間を超絶した、不生、不滅、不増、不減——真理といふか、原理といふか——言語道斷の一物を知つた時、それで己れは他と共に其の一分體であり、否、全體であると悟つた時、名狀すべからざる敬虔の念か油然として起らざるを得ないではないか。そこで吾等人間の道とはどんなものかといふ事は、大抵見當がつく筈だ。子貢ではないが一言にして終生之を行ふべき標語は何ぞ、孔子は之を「忠恕」と教へられた、聖人の言に素より間違はないが、併し我等日本人には何だか耳遠く響く、十人十色で人によつて色々の標語はあり得る「愛」といひ「親切」といひ「忠實」といひ「奉仕」といふなど、何れもよ

いには相違ないが、自分は曩に「親切」第一主義なる事を主唱し、一、二の雑誌にも掲載したが其後聊か研究すると、長し短しで物足りない感じがする。最近に至つて初めて自分として意に適したものを得た。それは「大事」と言ふ標語である。此の一語に無限の敬虔、無限の慈愛、親切も忠實も、奉仕も一切含まれて居る。随て前の四つでは宛てはまらない場合でもこれはよく似合ふ「子供に忠實にする」「財産を愛する」「職務に奉仕する」「國家に親切にする」などは皆おかしなものだ、之に代ふるに「大事にする」とすれば悉く宛てはまる。殊に「君」と「親」とについては西洋流ならば知らぬ事、日本流では「大事」でなければ納まらぬ。これは偶然の思ひ付きの如くで、實は差別超越即ち人格平等の大原理の體現であるからである。今一つ「定着禁物」に對しては如何、曰く他なし、「油斷大敵」即ちこれである。差別超越、人格平等は目的で執着脱却は方法である。「大事」の一語で目的と方法と二つながら體現する靈妙なる言葉があるとは不思議ではないか、而かも漢語にあらず舶來語にあらず、我等日用常套語たる生粹の日本語であるに至つては何とも言はれない。一體長い理窟は諒解にはよろしいが、實行の段になれば之を壓縮した標語によらねばならぬ。ゆゑに「大事」の標語によつて一切の諸物「森羅萬象」悉く身に觸れる事物に對しては「大事」にすることの實行を奨むるものなり。

後 編

茲に宣述する十項目は、新思想の反動に非ず、亦た舊思想に囚はれたるにもあらず、天下の中心道即忠道所謂眞の中庸道を行かんとするもの之を中外に施して悖らず、萬國に通じて誤らざるの大道と自信して宣述するものなり。青年諸子は勿論老少共に熟讀一番實踐躬行あらんことを切望する所以なり。

第一 大 事

凡そ人といふものに就て先づ第一に擧ぐべきは忠實の心といふ事である。今これを大事と稱して置く、苟も人にして物事を大事に扱ふといふ心がけが無ければ既に人でないといふてもよい。其かはり、其心かけがあるとなれば世上に超越して眞に人は萬物の靈なりといふ事ができる。此心かけこそ相互扶助、人類相愛の大理想、社會圓滿、世界平和の根本義が伏在せる人間無上の至

寶で在て、恐らく、人生此位大切なるものは又とあるべからず。以下各條皆此根幹より自然に發生する枝葉の繁茂であるといふてよい。

智仁勇の三徳は世に處して事を行ふに必要な理想的の常識であるが其由て來る所は矢張り忠實に事を處するに大事になす。切言すれば道德だの責任だのといふ事は、つまり大事に事をなす事である。大事とは親が子に對する懇切の真情、何ものも及ばぬ懇篤極まる心ざまである。昔からよく用ひ來れる言葉がなく三嘆するの外はない。而して此大事は人々職業、事業は勿論、鳥獸にも草木にも將又諸道具類の取扱にも總ての物あらゆる物にまで及ばさねばならぬ。勤儉も貯蓄も皆大事心より自然に現はれて來るものである。人たるもの殊に日本青年たるものが爾今以後宜しく脊々服膺すべきは實に此一大美徳の大訓言である。爰に今更大事の事を大事に宣べんとするのは又大事の實行であると信ずるからである。

第二家 庭

日本の團體

凡そ人が社會に出でんとするには先以て道德を辨へねばならぬ。其最初は家庭より出で其根元

道德の根元
天御中主尊
より諸册の
二神に至り
一本兩幹千
枝萬葉の子
孫繁昌をな
し茲に家族
主義の一大
基礎成り、
道德の根
元、家庭の
真情、悉く
兼ね備はる
を見る今日
の社會及國
家も皆此家
族主義の教
を受けたる
ものに非ず
や。

は夫婦によりて創造せらる。故に夫唱婦隨の古名訓によりて始めて家庭の平安生活の樂事が營まれ、此處に於て社交の準備、處世の練習が日々夜々に知らず識らずの間に遂げられるは當然の事である。此間に在て各自大に健康に注意して能く父母に事へ、祖先長上を敬ひ、夫婦相和し、子女を慈しみ、兄弟睦じく、親類、朋友に交るに信義を以つてし、苟も自ら欺かず人を偽らぬよう専心私徳の修養に鍊磨の功を積みて之を公德に及ぼすべく社交界に對する標準を定め、兼て世上に其模範を示すの覺悟を爲すべきものである。

第三國 家

凡そ家庭に於て其家人に宜しきを自得したるものは國家といへる。其累成團體の大家族に對しても亦其道を誤るといふ事はない筈である。即ち父母を尊び能く之に事へ得たる孝行の道は直ちに之を國君に移して天晴忠良の國民たるに恥ぢず、兄弟朋友親類に盡せる赤誠を以つて國家社會に臨めば信義に背かぬ道德堅固の好紳士となる。特に日本は家族制度の國であるから家庭に於て是等の修養に最も適して居るは甚だ幸である。此心を以て天地を貫き各人油斷なく邁進すれば、

實に文明國民として堂々天下に立ち一際目立つ民族として世界に其覇を稱するに至るは毫末も間違なしと確信する所である。併しそれは自分の國民のみが立派であればよいといふやうな偏見では一向に値打はない。先づ己れを能くして而して後隣人に及ぼし世界の總人類をして皆かくの如くならしめたいといふ、氣魄精神がなければ大事主義に背く事いふまでもなし。

第四 社 會

凡そ人類は交際の動物であるからは小大必ず交際團體を形作る。其最初は夫婦に始まり、忽ちにして親子、兄弟の一家族となり、順次累成的團體を結び大家族の社會に到達する。此社會たるや一民族の場合もあり、一國家の場合もあり、或は世界萬國を打つて一丸と見る場合もあるのであるが、何れも人と人との大事第一主義より出發して共同生活の能率増進を理解し、俱に共に文明の向上に努力し、而して一家の安堵、一國の文化終に全人類の幸福、滿世界の平和といへる一大團圓を實現することに依て日本青年否人類の一大心事、一大理想とせねばならぬ。蓋亦人が己に對し人に對し天に對するの務といふは只是のみである。

第五 學 問

凡そ人たるものが世に立ち事を成さんとするには、それ相當の學問が無くてはならぬことはいふまでもなし、舊來の智識と俱に最新の科學をも會得して居らねば人を救ひ、國を救ひ世を救ふの三大事に不覺を取らねばならぬ。此三大事は頓に己を救ふ所以であり、己を救ふは學問の本領である。學問とは己を救ふの術である。即ち知に關し、徳に關し體に關するいろ／＼の智識に就て心會する事で古來の所謂智仁勇の三徳を完備するのがそれである。故に世に處し事を行ふに苟も此三者の一に偏せば其事必ず崩壞の端を萌す。智に傾きては苛察に陥り、仁に過ぎては果斷に乏しく、勇に走りては暴戾に流れるといふようでは是眞智眞仁眞勇とはいへない。眞の智仁勇は眞善美である。眞善美は即ち中庸の道である。古來聖人も能くし難しとせる此中庸を得るの道は實に熱誠忠篤の小心地に培養するに眞の智仁勇といへる三大植物を以てするの外はない。是ぞ青年の常道として當に受くべき眞教育で眞の學問であらねばならぬ。かくの如くにして其習ひ性と化ししたる眞の徳を持っては何事も勉めずして中し、思はずして得るといふ眞の樂地に達せられ

る。人の道たる忠愛、信義、事功、建立亦皆自ら其中に在り、眞の學問眞の教育是なくんば將た何かせん。

第六 勵 精

凡そ人たるものは勤勉勵精の徳を持たねばならぬ。遊惰に日を送るの不愉快なるは何人も同じ事であらうが、不圖した場合から不愉快ながらも何時とはなしに勤勉の手を緩め惡癖を生ずる事がある。是は己の爲、人の爲、又國家社會の爲めに惡徳とする所であるから始終勉強否いや／＼ながら強ひて勉めるといふでなく、樂んで勤勉するといふ習性を養はねばならぬ。既に前項に依り大事になすことや、智仁勇の諸徳を備へたれば事物に勉強するといふ念でなく、心から愉快に勵精勤勉するのだから其快感極りなきに至るは自然の數である。一體勉強では愉快でなくやるのだから能率も隨て擧らぬ事に成る。我青年諸子たるもの、宜しく特に發憤勵精樂しんで老の將に至らんとするを知らずといふ様に只漠然向上の一路に突進するあるのみである。見よベルギーは天恵の資源極めて少く日本と同様に土地も狭し人口は其二倍もあり原料食料等に至ては殆んど皆

外國よりの輸入であるといふにも拘らず決して移民問題などの騒ぎも起らず、國民は未だ曾て生活難を味ふた事もない。而して産業は偉大なる發達を遂げて其生産物の五割も七割もが却て輸出せられて居るといふは抑も何故であるか。是皆國民が擧つて精勵し樂んで事に従ふが爲めに外ならぬのである。心せよ、我心友諸君。

第七 節 制

凡そ人たるものが其本能を恣にする時は獸類と同様で世の秩序も保てなくなり、其身も亦亡滅を招かねばならぬ。之を能くするは、只己に克つ眞の勇氣のみである。是さへあれば如何なる難事でも出来ぬといふ事はない。故に常に質實剛健忍耐分別以て其擅私橫暴の惡徳を節抑制禦せねばならぬ。是公私の幸福を計り、天下の安寧を維く所以である。正奇交々行るは兵家の常といふが、平時の常業としては或は機を見るに敏なる必要の場合もあれども苟も成功を僥倖に求むるが如き薄志は斷じて持つべからず。常に夢中の機に投じて萬金を一攫し、世の弱行者流と競争するを事とし、以て豪奢を一代に誇らんとするが如きは、卑怯の甚しきものとして擯斥せなければな

らぬ。宜しく斯心以て天下に臨み、斯腕以て正業に振ふべし。彼節約の如きも亦節制の私徳で日々汲々として勞務に服し、其勤勉に酬ひられた結果は浪費を避けて之を儉約し成るべく其幾部分を貯蓄して私の後事の爲めに備へ公の經濟の爲めに勉めねばならぬ。是亦自己の爲めながら、延ひて社會を利用する一大徳行である。世上に於ける勤勉貯蓄宣傳の根源も蓋これより始まらねばならぬ。

第八 規 律

既に前項に於て秩序と節制との大切なることを會得したるものは隨て規律を守る事が公德の大なるもので、是亦私徳の發露であることを自覺するであらう。何事を爲すにも規律が無ければ其大半は失敗に歸すべきものである。殊に多勢を相手とする事柄に於て最も然るものである。就中今日の如き激甚なる競争場裡に在て時間の觀念、時刻の規律無きが如きは日本人の一大缺點と云はねばならぬ。今後の青年たるものは非常の注意と一入の努力とを以て互に之を守らねば恐らくは世界の落伍者たるを免れまい。諸種の規律中、人と約して時を過まる位重大なる罪業はまたと

二つはあるべからず、たとへば今日我日本全國中に於て毎日幾百千種の集會もあるべく、又大小幾千萬組の交渉相談事もあるべき事など考へ來る時、約束の時刻を過る爲めに何程の時間を空費し幾萬人の迷惑を來し居るべきや、實に思料の外なるべきを感得するであらう。

今假に總日本の人口を七千三百萬人として此五パーセント即ち百人に付五人の待ぼけ人即ち時間の空費ありとすれば其總數三百六十五萬人に當る。此人々が一日平均各一時間宛の空費としても通計では三百六十五萬時間、凡そ人間一日の活動時間約十時間と見て之を一人に積算すれば三十六萬五千日分の怠りである。即ち一年の日數により三百六十五除れば一日にして恰も一千年分の一大損失を算出し、一年にして以上待ぼけ人各三十六日半宛其總人口の國家的空費積數は實に三十六萬五千年の後れを取る計算となる。殊に此延長年間の生活費は非常のものである。何と悚然として肌粟の生ずるを禁じ得ないではないか。更に之を貨幣價値に換算すれば總て之を勞働者とするも日本に於けるそれ等の平均收入一人一日約三圓としても尙且一日にして其損失三十六萬五千日分、一百九萬五千圓也を空しく消して仕まう譯となる。而も是只總人口五パーセントの其内の一二人が僅々一日丈の時間規律を守らざるに依るのみの結果である。即ち我々は毎年其時刻違約者の爲めに實に三億九千九百六十七萬五千圓、約四億圓也の巨額を濫費しつつあるのであ

る。我輩一夜心を潜めて茲に到り、熟慮をめぐらして一家一國の興亡に關する一大事件なるに及ぶ時、誰か一人として寒心せざる者あるべきや。況んや之を年々歳々繰り返して止まざるに於ては、猶更の事どもである。實に我等はこの時の問題を閑却して措て財政行政の整理を叫ぶも、儉約貯蓄の宣傳に奔走するも何の甲斐があらうぞ。やれ教育費の、飛行機資金のとぐづ／＼云ふて居るのは殆んど寧ろ滑稽に類せる沙汰ではないか。覺めよ、青年よ、奮へ同胞。

明治天皇御製

時はかる器は前にありなから

たゆみかちなり人の心は

第九 常識

凡そ智仁勇を兼備するは常識の理想であるか、先づ學を好みて智に近づき恥を知りて勇に近づき、力行して仁に近づくようにせねばならぬ。而して世に處し事を行ふには豫て家庭に於て體得した私徳の圓滿と總てに對して大事に成すの習慣とに由り大いに公德の發揮に努めねばならぬ。

此心常に失ふことなく、孜孜營々怠らぬならば、茲に始めて常識の玉成を見るのである。かくの如き常識を以て萬事に當れば從容として道に中るのである。又中らずと雖も遠からずといふ域に達する事が出来る。我が撰んだ職業に必要な専門的の事は技藝として最も深くなくてはならぬこと勿論であるが、苟も常識がなければ如何に他に優れた藝能が在ても、人物としては動もすれば變屈に陥り易く社會に和し難き結果を將來するの虞がある。かくの如くにして世に處せんとするも、亦難い哉で、常識の必要な所以も亦此にあること多辯を要さぬのである。

第十 實行

凡そ千百の善事美舉も實行なくんば何かせん。例へば本訓擧ぐる處の如きも其項目は只九條か十條に過ぎないが其意義は宏大無邊に互り總て緊要缺くべからざる骨髓のみを壓搾したるものであるから、是だけ實行すれば萬事に差支なしと信ぜられるもので、而もそれが上中下根其人々の天分相應に皆實行の可能性に富み、常識の豊かなる容易の事はかりであるが、それでも實行せねば皆目つまらぬ事になり、又如何に幽遠高邁の理想でも常識を超へ行ふに難く徒らに鬼面小兒を

脅かすの類では更に實際に益はない、苟も實際に實益あり、人生に幸福をもたらすと信ずるものは斷乎として之が實行に着手せねばならぬ。知りて行はぬならば殆んど知らぬ事と何の撰ぶ所もない。本訓分つ所の條目も其本元は甚だ簡單、甚だ明瞭で只一つの赤誠に過ぎぬといふてよい。爾餘は皆其發露で在て互に離れる所はない。一本兩幹千枝萬葉といふまでの事だから常に懇切摯實といふ事をさへ忘れねば、いや應なしに網擧りて目張る、いよ／＼簡明、いよ／＼容易、能はざるに非ず、爲さざるなりは、勇なきの甚しきものにして又智もなく仁もなきしれものである。夫れ實行と否とは人間成敗の岐るる所、斷じて行へば鬼神も之を避くといふ、自己の將來と天下社會の運命とに關する大問題の伏在せる所は茲である。何事も單に知りて居るのみで實行せぬならば恰も昔の大福帳の如きものである。諸子知らずや昔の大福帳なるものを、徒らに出も入も片ツ端からすんべらぼうに付け込んで收支損得が如何様になり行くものか少しも分らず、只無暗に記入してあるといふまでである。帳合の法として何の價値があらうか、是殆んど帳簿の備へなきにも等しいものである。彼の何等統一的識見なく只々頭にいろ／＼の事項ばかりを詰込んで得々たる大先生となるが如きも亦社會の爲に自己の爲めに餘程熟慮せねばならぬ事どもである。

社會の繼續者たる諸子よ、願はくば晝思夜念ゆめ此實行の大旨に遲疑あるなからんことを。

終りに臨み重ねていふ、「嗚呼親愛なる青年諸子、牢記せよ此十個の訓言を」

忠道歌序説

古人は忠臣を求めるには必らず孝子の門に於てするといひ、又孝は百行の本なりとも云つた。けれども忠も孝も事にあたつて懇切に行ふと云ふ唯一の大根本から生えて來る枝葉だとは言はなかつた。予の實驗によれば、孝子必らずしも忠ならず、忠臣必らずしも孝子ならず。況んや此忠臣若くは孝子が必らずしも其朋友兄弟に信義友愛があるでもないに於いてをや。そこで今大に此語に訂正を施したい。即ち忠孝二元論の様なものとはさりと捨てて單に懇篤大事の意味に於ける忠の一元論で推し進む強ひて古人の句調を學ぶならば、

忠臣ヲ求ムルニハ孝子ノ門ニ於テシ、孝子ヲ得ルニハ懇切ノ室ニ於テス、夫レ懇切ハ萬徳ノ根源ナリ。

と斯様にするのが本筋だと信ずる、此懇切なるもの即ち事にあたつて大事に行ふといふ事は兄弟朋友は扱て置き世間一般の人と物とに對して大事なるものにして未だ曾て親に孝行、君に忠義で

ないものはない、一體忠義と孝行とは其赤誠忠魂を君と親との二つに盡すといふまでの言葉に過ぎず、實に是長上否君父のみに對する跛行的半面の教草に止まるではないか、尤も振り反つて謹んで之を案するに親が子に對するが如き切實懇篤の情は中々以て君と親とは及ぼし難いといふ所から特に此忠孝二元訓を立てられたものとも見られないではない。親と切との二字を續けて最も滲透切實の情を表現した古人の用意も亦三嘆に價するのである。勿論有史以來幾億萬の中には例外をして一二無慈悲殘酷の者がないでもないがそれは孟子が仁義を賊するものは天位に座しても一夫だといふた類で眞の親ではないといふ理窟になる。抑も忠孝の極意はと言へば素より惻款激切、熱誠摯實に在るのだから一言以て之を約すれば曰く忠のみである。忠なる哉、忠なる哉、之を君國に移せば忠義となり、之を父母に移せば孝行となり、兄弟に移せば友愛となり、朋友に移せば信義となる。至誠懇情といふものは何にも態々忠と孝との二元に限らるべきものでない。於是乎予は嘗て「忠は萬徳の源」といふ。蓋し我々が常に祈願して居る所の人類の幸福も斯道即忠道を措ては他に何處より來るべき筋道は決してあるべきものではないと確信せられる。茲に於て大事第一否大事萬能主義の我忠道は他の宗教に擬らへていへば、是は中心教とも稱すべきもので、此忠道歌は恰も佛家に於ける心經で在て我に於ては中心經何人も不斷に之を朗讀誦し自然

に其心性を養はば其功德や最も廣大であらうと思はれる。歌の字數も二百九十有七であるから丁度彼の心經に匹敵する位で可なり讀み格好なものと信する。願くば天下博雅の君子、幸に此文字章句を調整して日夕の朗讀に勝へ、後進の修養に資し、以て人の子の心の奥底に忠徳の王國を建設する事に大賛成せられんことを切に希望するものなり。

東都澁谷千駄溪

八十叟 中井榮次郎

忠道歌

嗚呼忠哉意味何深長
無限悵款無限情
海枯而底終可見
人忠而德不可衡
天下至寶唯忠耳
忠兮忠兮吾服之鄉
有忠則于人道昌
無忠則于人道亡
天皇會用之爲名君
將軍會用之爲忠臣
政家用之爲賢相

嗚呼忠ナル哉意味何ゾ深長ナル
無限ノ悵款無限ノ情
海枯レ而底終ニ見ル可ク
人忠ニシ而德衡ル可ラ不
天下ノ至寶唯忠耳
忠兮忠兮吾郷ニ服ス
忠有レバ則チ于ニ人道昌ヘ
忠無ケレバ則チ于ニ人道亡ニ
天皇會テ之ヲ用ヒテ名君ト爲リ
將軍會テ之ヲ用ヒテ忠臣ト爲ル
政家之ヲ用ヒテ賢相ト爲リ

緇流用之爲高僧
或有有用之爲孝子
或有有用之爲義士
或用爲慈母
或用爲節婦
不問陰德與陽行
用之無未見光揚
語云孝者百行之元
我惟忠是萬德之源
忠之爲文爲中心
忠心卽是爲中庸
萬象賴以常整頓
人事賴以自從容
嗚呼忠哉先聖在

緇流之ヲ用ヒテ高僧ト爲リ
或ハ之ヲ用ヒテ孝子ト爲ル有リ
或ハ之ヲ用ヒテ義士ト爲ル有リ
或ハ用ヒテ慈母ト爲リ
或ハ用ヒテ節婦ト爲ル
問ハ不陰德ト陽行與ヲ
之ヲ用ヒテ未ダ光揚セ見レ不ルハ無シ
語ニ云ク孝者百行之元ト
我ハ惟フ忠ハ是レ萬德ノ源
忠ノ文爲ル中心爲リ
忠心卽チ是レ中庸爲リ
萬象賴テ以テ常ニ整頓
人事賴テ以テ自 從容
嗚呼忠ナル哉先聖在リ

水長流山且不崩
 經於是緯亦於是
 忠哉忠眷々服膺
 聞說古來忠臣求孝子
 焉知敬愛信義皆出忠
 忠孝分語却誤俗
 又憾多少悲愴虛譽風
 舊訓重矣我不輕
 我不輕矣奈洪訓
 願斯心以任獻替
 發憤一番資奎運
 由來忠孝稱深語
 俚耳淺入旨難保
 此語今當單改忠

水長キニ流レ山且ツ崩レ不
 經ニモ是ニ於テシ緯ニモ亦是ニ於テ
 忠ナル哉忠眷々服膺セヨ
 聞說古來忠臣孝子ニ求ムト
 焉知ラン敬愛信義皆忠ニ出ツ
 忠孝語ヲ分ツテ却テ俗ヲ誤ル
 又憾ム多少ノ悲愴虛譽ノ風
 舊訓重シ我輕ンゼズ
 我輕ンゼ不矣、洪訓ヲ奈ン
 願クハ斯ノ心以テ獻替ニ任ジ
 發憤一番奎運ニ資セン
 由來忠孝深語ト稱スルモ
 俚耳淺ク入ヲ旨保テ難シ
 此語今當ニ單ニ忠ト改ム當シ

一誠萬通是忠道
 一切諸物悉大事可行

一誠萬通是忠道
 一切諸物悉大事可行

右凡十四章、四十一句、二百九十有七言

449
21

終

